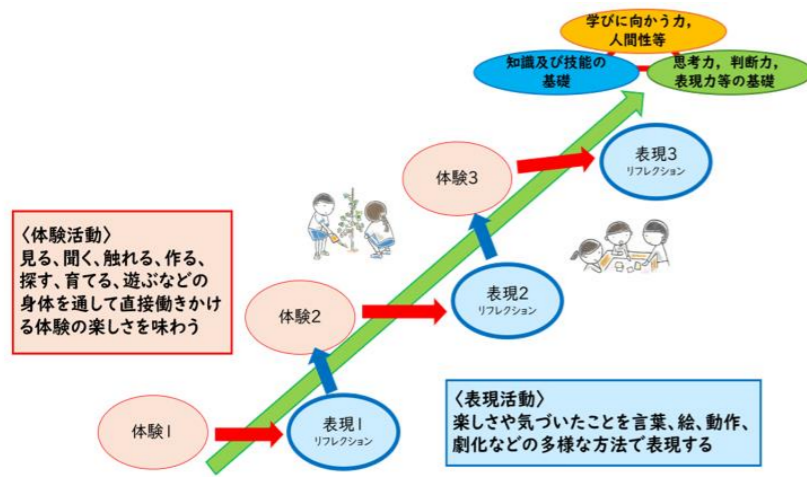


小学校 生活

～子どもの「思い」から始まる、深い学びのサイクル～

学習指導の全体像：体験と表現のサイクル ※単発の活動で終わらず、「活動→振り返り→次への意欲」のサイクルを回します



生活科の学習を通して身に付けさせたい 資質・能力（目指す子どもの姿）

- ◎ **知識及び技能の基礎**
活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴のよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- ◎ **思考力、判断力、表現力等の基礎**
身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- ◎ **学びに向かう力、人間性等**
身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

重点1 子どもの「やりたい!」「もっと!」を形にする授業をつくる

- 子どもの「大好き」や「地域の宝」等を授業のスタートにする。
- 「これは自分に関係があることだ!」と子どもが思える工夫をする。
- 「やってみる（体験）」と「伝えてみる（表現）」のサイクルを回す。
- 他の教科の学習も生活科にミックスさせる。※右ページに詳細あり
- 幼児期の遊びから中学年以降の学習へ橋渡しする。

「幼児教育」と「小学校教育」がつながってどうなる? (幼児教育及び小学校教育関係者向けの参考資料) (文部科学省)

※「幼児期の遊びを通じた学び」と「生活科」とのつながりを意識した授業展開例が紹介されています。

◆地域のひと・もの・ことの中から、子どもたちがワクワクするような、その時期（季節）ならではの仕掛けを準備します。

◆子どもたちが「もっとこうしたい!」「自分ならこうする」と自分事として取り組める活動を大切にします。一人一人が自分の生活をよりよくしようと動き出す姿を目指しましょう。

◆「やってみようだった?（振り返り）」を挟んで、さらに「次はこうしよう!（次への意欲）」と活動を螺旋（スパイラル）状に繰り返します。この「体験」と「表現」の往復が、深い学びを生み出します。

◆生活科の活動中に、国語で習った言葉を使ったり、算数で学んだ教え方や比べ方を使ったりできるよう、教科の枠を緩やかにします。※右ページに詳細を紹介しています。

◆園で夢中になっていた遊びが、今の学びの土台になっていることを意識しましょう。同時に、今の活動が3年生からの社会や理科、総合的な学習の時間等での調べ方や考え方に繋がっていくことをイメージして授業を組み立てます。

重点2 子どもの気づきを深め、学びを豊かにする指導

- いろいろな考え方をどんどん試させる。
- 「誰に」「何のために」伝えるかを意識させる。
- みんなで見合う・振り返る場を大切にします。

StuDX Style GIGA スクール構想を浸透させ学びを豊かに変革していくカタチ (文部科学省)

※児童の発達段階や特性を考慮した上で、ICT を活用した授業場面が紹介されています。

◆子どもが「あっ、見付けた!（見付けた）」「これとこれは似ているな（比べる）」「～みたいだ（たとえる）」「こうすればもっとうまくいかな（試す・工夫する）」と思える場面をたくさん作りましょう。こうした試行錯誤の繰り返しが、子どもの思考力を育てます。

◆「お家の人に」「友だちに」など伝える相手と目的をはっきりさせます。そうすると、子どもたちは、言葉だけでなく、絵、動作、劇など、「どうすれば一番伝わるか」を一生懸命考えるようになります。

◆一人一人の気づきをクラス全体で共有しましょう。友だちと見せあうことで新しい気づきが生まれます。この伝え合いと振り返りを挟むことで、自分自身への成長にも気付くことができるようになります。

重点3 子どもの「できた!」「気付いた!」を逃さず、次に生かす（指導と評価の一体化）

- 「どんな姿が見られると良いか」を子どもの具体的な行動や言葉で想定する。
- 全員の記録をする時間をあらかじめ決めておく。

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究所）

※巻末資料の「内容のまとまりごとの評価規準（例）」及び「具体的な内容のまとまりごとの評価規準（例）」を参考に、小単元の評価規準を作成することができます。

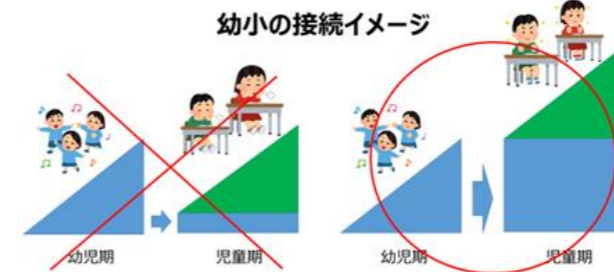
◆「～を理解する」といった難しい言葉ではなく、目に見える子どもの動きや言葉（具体的な姿）で評価規準を作りましょう。

◆毎時間、全員を評価して記録に残すことは現実的ではありません。単元の中で子どもの成長がよく見える場面（評価場面）をあらかじめ絞り込んで、計画表にメモしておきましょう。例えば、「発表の時間」や「観察カードを書く」など、子どもが思いを表現する場面は、評価の絶好のチャンスです。

生活科は幼児教育と小学校教育とをつなぐ中心教科

「例えば、水道から樋をつないで水を流そうとして、水がこぼれないような仕組みを幼児同士で何度も試したりすることや、自分たちで考えた話を人形劇にして年少の幼児に見てもらおうと、身近にある段ボールで舞台を作ったり、紙やテープなどの素材を生かして、色や形を工夫して飾りつけた小道具を作ったりすることなど、小学校以降の学習の基盤は幼児の姿の中に確かにある。そうした学びを、**小学校の生活科を中心とした学習において発揮できるようにし、児童の思いや願いをきっかけとして始まる学びが自然に他教科等の学習へとつながっていくようにすることが、幼児期における遊びを通じた総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行することである。**」と小学校学習指導要領解説 生活科編（P62）で語られています。

幼児教育と小学校教育では違いはあるものの、子どもの育ちは連続しており、子どもの成長を切れ目なく支える観点から、子どもの立場に立ち、幼児教育の遊びを通して培った学びの上に、小学校教育を展開していく（右図）のような意識が重要です。



島根県幼児教育センターでは、令和7年3月に「しまねの架け橋期の教育ガイド」を策定し、県内各小学校及び各幼児教育施設に配付しています（HPでも全ページ掲載しています【右二次元コード】）。



幼児教育と小学校教育との接続の鍵となる架け橋期に焦点を当て、架け橋期のカリキュラムや生活科を中心としたカリキュラムデザイン等について、右のように分かりやすく解説しています。

- VI 小学校における取組（上記ガイドP.48～52）
- 2 生活科を中心とした学びのつながり
 - (1) 生活科の役割
 - (2) 生活科を中心としたカリキュラムデザイン
 - (3) 幼児期の経験を活かした教科指導

特に小学校入学当初においては、幼児期の自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科における学習に円滑に接続されるよう子どもの発達を踏まえ、生活科を中心に「合科的な指導」、「関連的な指導」や弾力的な時間割を設定する等、指導を工夫しましょう。

	タイプ(例)	カリキュラムにおける具体例
合科的な指導	生活科を中心とした単元の学習活動において、複数の教科の目標や内容を組み合わせることで、指導の効果を高める。	生活科の学校探検で気付いたこと等を言葉で表現したり、友だちと伝え合ったりする学習活動において、国語の資質・能力「伝えたい事柄や相手に応じて、声の大きさや速さ等を工夫すること」について指導することで、より効果的にねらいの実現を図る。
関連的な指導	【関連A】生活科の学習成果を他教科等の学習に生かす。	生活科で春の自然を観察したり、自然のもので遊んだりする体験が、音楽科で春の歌の曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて気付くことに生かされるように関連を意識して指導する。
	【関連B】他教科等の学習成果を生活科の学習に生かす。	ものと数とを対応させてものの個数を比べたり、個数の順番を正しく数えたり表したり、算数科で育成する知識及び技能が、生活科の学校探検で見付けたものを数える際に生かされるように関連を意識して指導する。

目標5との関連は、URL または二次元コードからご確認ください。

URL <https://www.shimane-ec.pref.shimane.lg.jp/shien/tokubetsushien/-1218.html>